



星野富弘さん ありがとう

2024年4月28日に詩画作家の星野富弘さんが亡くなられて1年が過ぎました。

星野富弘さんは、詩画作品を通じて多くの人々に深い感動と生きる勇気を与えてくれました。

今号では、写真と共に在りし日を偲びます。



- 01. 大学の体操部時代 (1965年)
- 02. 近所のおじさんと力くらべ (1969年)
- 03. 入院中に展覧会の感想文を母と読む (1979年)
- 04. 心身障害者センターにて初めての展覧会 (1979年)
- 05. 前橋キリスト教会にて結婚式 (1981年)
- 06. ハワイで開催された詩画展にて (1997年)
- 07. 愛犬ミシンと鈴の鳴る道を散歩 (2005年)
- 08. 足尾・松木沢にて (2009年)
- 09. 山崎園子氏の講演会にて (2011年)
- 10. 『愛、深き淵より。』出版30周年記念企画展 (2011年)
- 11. 谷川岳一の倉沢にて (2015年)
- 12. 富弘美術館開館30周年記念式典 (2022年)
- 13. 星野富弘お別れの会 (2024年)
- 14. みどり市名誉市民称号贈呈式 (2024年)



1979年 (33歳)
入院中、最初の展覧会を開く。退院し自宅療養する。

1981年 (34、35歳)
『愛、深き淵より。』を出版。渡辺昌子さんと結婚。

1982年 (35歳)
高崎市で「花の詩画展」を開催。以後、全国各地で開催される。

1990年 (44歳)
東村名誉村民の称号を贈られる。

1991年 (45歳)
東村立富弘美術館が開館。

2001年 (55歳)
サンフランシスコとロサンゼルスで「花の詩画展」を開催。

2006年 (60歳)
熊本県に芦北町立星野富弘美術館が開館。

群馬県名誉県民の称号を贈られる。

2024年
逝去 (享年78)。
みどり市名誉市民(第一号)の称号を贈られる。

1946年
群馬県勢多郡東村(現・みどり市東町)に生まれる。

1970年 (23、24歳)
群馬大学教育学部保健体育科を卒業。中学校教員になるが、クラブ活動の指導中に頸髄を損傷し、手足の自由を失う。

1972年 (26歳)
群馬大学医学部附属病院に入院中、口に筆をくわえて文や絵をかき始める。

1974年 (28歳)
病室でキリスト教の洗礼を受ける。

年表



来館者の声

富弘さんの作品をたくさん見てきましたが、どれも本当に感銘を受け、生き方を考えさせられます。富弘さんの作品からは負けない力や精神力を強く感じるので。特に『折れた菜の花』という作品からは生命力を感じ、強く生きようと思わせてくれます。

(栃木県・女性)

大学時代にコーラス部に所属しており、そこで星野富弘さんの詩画の一節が含まれた合唱曲を歌いました。それが富弘さんを知ったきっかけです。富弘さんは、体育教師としての人生を歩むはずでしたが、不慮の事故によってその夢を絶たれてしまいました。それで嘆くのではなく、できることで幸せを見つけようとする生き方が詩画から感じ取れます。

(兵庫県・男性)

富弘美術館は、 どんな場所でありたいか

子どもの頃に富弘さんの作品を見ても分からないという人が多いと思います。成長して人生の段階を踏んでいく中で、つらいことも悲しいことも経験し、そこで改めて富弘さんの作品を見たときに、共感したり、励まされたり、慰められたりするかと思います。だからこそ、まずは富弘さんのことを知ってもらい、大人になってからも一度美術館に足を運んで、富弘さんと対話するような感じで作品を見てほしいです。きっと何か語りかけてくれたり、寄り添ってくれたりするものがあるのではないのでしょうか。富弘美術館は、そのためのものである場所でありたいです。

(富弘美術館学芸員・相崎ちひろ)



星野昌子 さん
(星野富弘さんの妻)

富弘さんは普段どんな様子 で絵を描いていたか

よく野の草花を描いていました。私は、花屋で売っている花の方がきれいなのにと思って見ていたんですが、いざ完成した作品を見ると、きれいで訴える力がある作品になっていました。そんな作品を見て、どの花もきれいなんだなって富弘さんに教えられました。富弘さんは、花を正面からだけでなく、いろいろな角度から細部までじっくり観察していました。完成した作品を見ると、この花はこんなふうになっているんだなと気付かされました。

何の絵を描いていた時の ことが印象に残っているか

『鳩ぐるま』という作品を描いた時は、もうじき完成するところまで車輪部分に描き足りていなかった部分が見つかり、わざわざ消して描き直してました。また、夜に花を咲かせる月見草を描いた時は、夜に絵を描くことになったので驚きました。

—— 普段の富弘さんはどんな人だったか

冗談やダジャレをたくさん言う人でした。時にはけんかすることもあったのですが、面白い返しで和ませてくれるので自然と仲直りしていました。

—— 富弘さんが亡くなって一年が過ぎた今の心境は

一緒に生活していた頃のことを忘れないようにと、いつも思い出しながら過ごしています。今も詩画集を繰り返し読んで、テレビの録画を繰り返し見たり、テレビの録画を繰り返し見たりしているのですが、何かいつもそばにいてくれるような気持ちになります。どこから見守ってくれているような気がするんです。毎日カレンダーになった作品を眺めていて、いつも力をもらったり、教えられたりしています。

インタビュー

星野富弘さんを偲ぶ



聖生 清重 さん
(富弘美術館 館長)

—— この一年で来館者の反応に
変化はあったか

沈痛な表情で真剣に作品と向き合っている人が増えた印象があります。来館者が自由に書けるノートにも「ありがとう富弘さん」「生きる力をもらいました」といったコメントが多く見られます。

—— 改めて富弘さんの偉大さを
感じた瞬間は

数え切れないほどの人が星野富弘という人間の生きざまを知り、作品を見た人が生きる力をもたらしていたことです。喜び、悲しみ、苦しみ、どんな感情の時に合っても、富弘さんの作品は何らかの形で答えてくれるのです。作品を見た人は、励まされたり、勇気づけられたり、癒されたりします。それが生き

る力になっているのだと思います。

—— 富弘さんの作品が多くの
人に愛されているのはなぜか

富弘さんの作品は、豊かな気持ちになるだけでなく、生きる力になっていきます。彼の人格を形成し、作品にも影響を与えているものとして、キリスト教への信仰があります。「生かされた」という気持ちや目に見えないものに対する畏敬の念があります。一本の線を引くときにも、色が塗るときにも、祈りが込められています。だからこそ、作品を見た人に迫ってくるものがあるのではないかと思っています。

—— 富弘さんのことを後世に
どう語り継いでいきたいか

人は皆誰しも生きていく間にさまざまなことを経験しますが、苦しい時に富弘さんの作品があつて良かったと思える人が多いです。それこそが富弘美術館が存在している理由であると思っています。人が生きていく限り富弘さんの作品は必要存在であることを伝え続けていきたいです。

～私の好きな詩画作品～



『いのち』

富弘さんが命より大切なものを見つけるまでの過程を思い巡らせ、自分にとって命より大切なものは何だろうかと考えさせてくれる作品です。

(相崎ちひろ)



『日野草』

人は幸せを求めて生きていますが、幸せは特別なところではなく、意外と日常や普通の中にこそあるという富弘さんの問いかけが表現された作品です。

(聖生清重)



『心のアンテナ』

富弘さんが亡くなってからあまり活力がなかったのですが、自分も心のアンテナを空に向けて広げ、日常生活をしっかりとしていこうと思いました。

(星野昌子)

【編集後記】取材を通して、富弘さんに心から感謝している人が多いことを改めて感じました。富弘美術館では季節ごとに企画展を開催しています。ぜひこの機会に美術館に足を運んで、富弘さんの作品をご覧になってください。あなたの心に寄り添ってくれる作品が見つかるかもしれません。